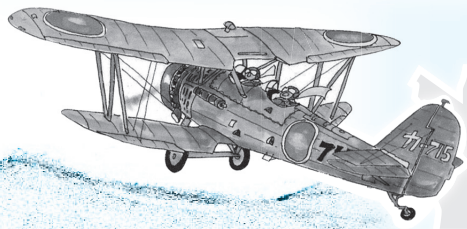
# 予科練平和記念館だより



役場2階企画課内に予科練平和記念館整備推進室が発足しました。推進室では、予科練や海軍に関する資料や写真を集めています。ご存じの人はぜひご一報ください。

暑中見舞いの絵葉書が店頭に並びはじめ、朝顔や金魚、花火など夏らしい図柄を目にするたびに、梅雨明けの待ち遠しい季節です。皆さんはいかがお過ごしでしょうか。今月号は、先月にひき続き、昭和20（1945）年6月10日の空襲について、当時15歳だった人の体験談をご紹介します。

## ●少年が見た空襲（立ノ越～青宿）

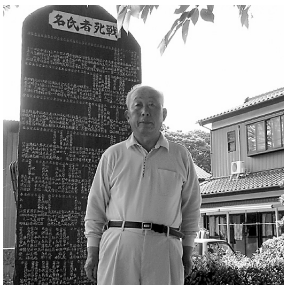
戦局押し迫った昭和20（1945）年3月、旧制土浦中学から第一海軍航空廠（かいぐんこうくうしょう：現在の陸上自衛隊武器補給処）に学徒動員された少年がいました。名前は松浦繁（しげる）さん。現在77歳で立ノ越にお住まいです。当時立ノ越の実家から通う航空廠では、傷ついた零戦の翼を補修したり、特攻機にするため、赤とんぼとよばれた練習機（九三式中間練習機）に爆弾をつり下げる部品を作ったりしていたそうです。

6月10日の日曜日、松浦さんは自宅にいました。長兄は4月に戦死、次兄は出征していたので、三男の松浦さんが家を守っていたのです。朝8時ごろ、ラジオの『東部軍管区情報』で「B29の編隊は霞ヶ浦方面に向かいつつあり」と聞いた松浦さんは、それを家の人に知らせて外へ出ました。空には雲がかかっており機体は見えませんでしたが、「グゥーン…グゥーン」とB29特有のエンジン音が聞こえたそうです。最初の空襲の様子を、松浦さんは次のように語ってくれました。

「…ちょうど線路のガード下を通るときに、汽車なり電車なりが通るときあるんだよね。グワーグワーっていうやつね。そんな音がしたと思ったら、ガーッ、ガーッて（爆弾が）落ちてきた。そしたら、ダーンときたらもう一寸先が見えないんですよね。夢中になって伏せて、ダンダンダンダンときた…。」

2回目の空襲の後、母親の実家が被害にあったとの知らせを受けて、松浦さんは煙のあがる爆弾の跡も生々しく、触れないほど熱い破片が散乱する中を青宿まで駆けていきます。途中鹿島神社の山越しに土浦海軍航空隊が赤々と燃える様子を見ながら着いた母親の実家は、不運にも庭の井戸に爆弾が落ち、ひっくりかえった牛一頭を残して跡形もなく吹き飛んでいました。

夕方「予科練が埋まった」と聞いて鹿島神社を見に行った松浦さんが目にしたのは、防空ごうから掘り出され、きちんと七つボタンの制服を身につけたままの姿で畑のふちにずらりと並べられた予科練生の変わり果てた姿でした。最初の空襲の際、鹿島神社下の海軍の防空ごうに爆弾が2発直撃して、多数の予科練生が生き埋めになっていたのです。その光景は、62年経った今も目に焼きついているそうです。また、遺体を運ぶのに使われたため、青宿付近のほとんどの農家の雨戸がなくなりました。生き埋めとなった予科練生の救出作業は一週間以上続き、その間火葬の煙も絶えることはなかったそうです。




▲犠牲者のぼだいを弔った法泉寺（土浦市大岩田）の石碑と松浦さん

木洩れ日の中、鳥のさえずりに包まれた現在の鹿島神社は、62年前の出来事がにわかには信じられないような穏やかさに包まれています。しかし、鳥居の脇に立つ「被爆跡記念之碑」が、ここが悲しい歴史の現場であったことを物語っています。

▲鹿島神社（青宿）の防空ごう跡

### ◇予科練展Ⅱ（仮称）開催◇

予科練生の心にせまる企画展、ぜひ足をお運びください（入場無料）。

期日　8月4日(土)～26日(木)
　　※月曜日を除く
時間　午前9時～午後5時
場所　図書館2階視聴覚室およびギャラリー